

(10) わが国の透析患者における血清フェリチンと生命予後との関連性 (図表10)

論文の概要

血液透析患者と腹膜透析患者を対象に血清フェリチンと全死亡、心血管系疾患による死亡、感染症による死亡の関連について検討した縦断研究である。

タイトル：The Different Association between Serum Ferritin and Mortality in Hemodialysis and Peritoneal Dialysis Patients Using Japanese Nationwide Dialysis Registry

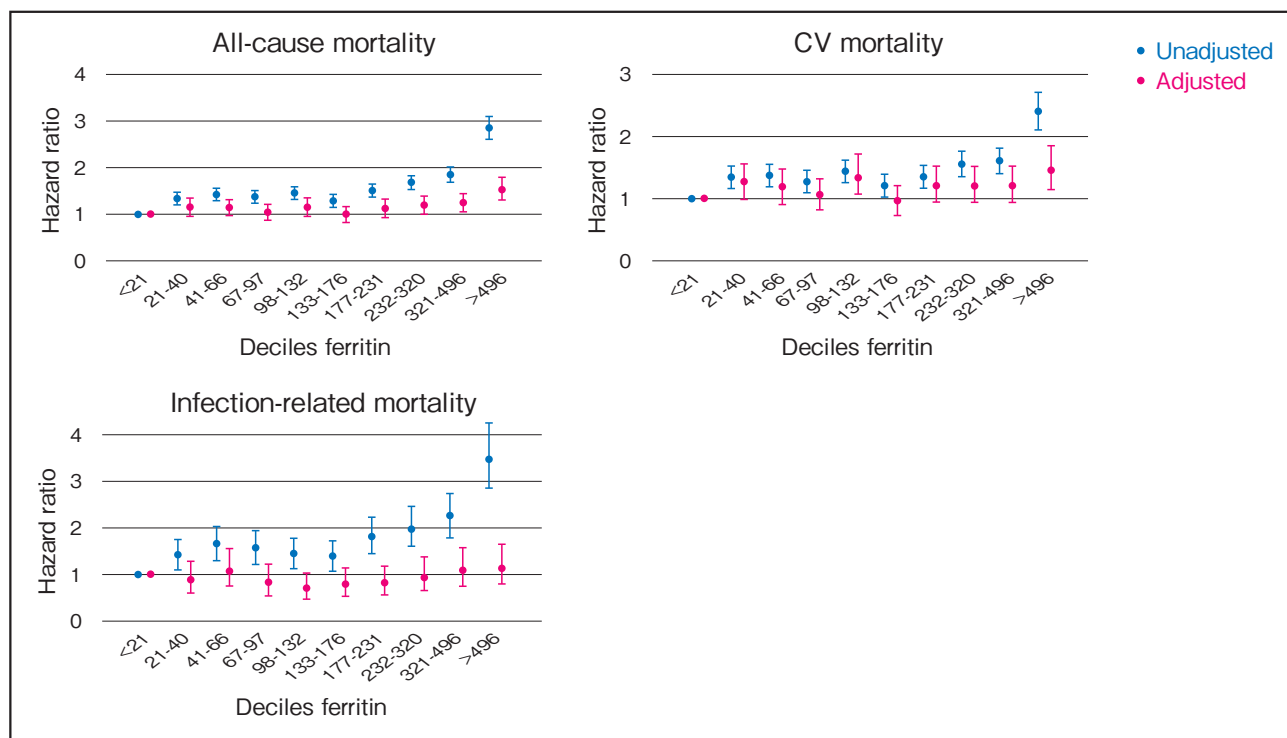
著者：Maruyama Y, Yokoyama K, Yokoo T, Shigematsu T, Iseki K, Tsubakihara Y

掲載：PLoS One 2015；10（11）：e0143430

対象：2007年末の時点で週3回の血液透析、もしくは腹膜透析を受けていて、検査値や翌年（2008年末）の転帰のデータがある191,902名

要因：全死亡、心血管系疾患による死亡、感染症による死亡

結果：単変量解析では、血清フェリチンが上昇するにしたがって、全死亡、心血管系疾患による死亡、感染症による死亡のリスクは増大した。多変量解析では、血清フェリチン高値群は低値群と比較して、全死亡で54%（HR 1.54；95% CI, 1.31～1.81）、心血管疾患による死亡で44%（HR 1.44；95% CI, 1.13～1.84）の有意なリスク増加が認められたが、感染症による死亡については有意なリスクの変化を認めなかった（HR 1.14；95% CI, 0.79～1.65）。一方で、腹膜透析患者においては、血清フェリチンと死亡率に有意な関連性を認めなかった。



解説

透析患者における腎性貧血の治療には、赤血球造血刺激因子製剤（erythropoiesis-stimulating agent：ESA）投与に加えて、鉄補充療法が行われており、多くのガイドラインで血清フェリチンとトランスフェリン飽和度（Transferrin saturation:TSAT）を指標として、鉄剤を投与するよう推奨している。しかし、血清フェリチンは、貯蔵鉄の指標のみならず、炎症などの急性期反応に伴って肝臓から血清中に放出される急性期蛋白でもあるので、その評価に注意を要する。血液透析患者を対象とした研究では、血清フェリチン高値の症例において、全死亡、心血管系疾患による死亡、敗血症、バスキュラーアクセス感染などの感染症リスク、及び感染症による死亡が多いことが知られている。日本人透析患者は欧米諸国に比較して、血清フェリチンが低いことが知られており、これは、鉄剤投与量のみでなく、炎症の程度が異なることを反映しており、日本人透析患者の死亡率や心血管系疾患発症率が低いことに関連していると思われる。本研究により、海外での報告と同様に、日本人透析患者においても、血清フェリチン高値群で、全死亡や心血管系疾患による死亡のリスクが高いことが証明され、血清フェリチンが重要な生命予後規定因子であることが判明した点で、大きな意義を持っていると考えられる。